

氏名・(国籍)	刘 暢 (中国)
学位の種類	博士 (文学)
学位記番号	博甲第27号
学位授与年月日	令和5年3月8日
学位授与の要件	学位規程第2条第2項該当
学位論文題目	縁起説にもとづくチャンドラキールティの修道論 — 『六十頌如理論注』 (<i>Yuktiṣaṣṭikāvṛtti</i>) を中心として —
論文審査委員	主 査 教授 齊藤 明 副 査 教授 デレアヌ フロリン 副 査 教授 幅田 裕美

論文内容の要旨

本博士論文の第一部は本論に相当する研究篇である。その中で、『六十頌如理論』の思想・修道論（第一章）、『六十頌如理論注』における修道論の体系（第二章）、チャンドラキールティによるアビダルマ教学に対する受容と批判（第三章）、チャンドラキールティによる伝統經典に対する理解（第四章）等の問題を中心として考察を加えた。第二部は関連テキストの校訂および現代語訳である。その中で、デプン寺写本等によって校訂した『六十頌如理論』チベット語訳テキスト、『六十頌如理論』の和訳、サンスクリット文による『六十頌如理論』の索引、『六十頌如理論注』のチベット語訳校訂テキストと和訳、六つの写本によって校訂した『プラサンナパダー』第十三章のサンスクリットテキスト、同章のチベット訳校訂本と和訳を提示した。

第一部において、第一章の第一節では、『六十頌如理論』の三種のチベット語訳（敦煌本、『六十頌如理論注』に見える偈文、後伝期の Pa tshab Nyi ma grags 訳）の関係を分析し、後伝期における改訂の意図は五点にある可能性を指摘した。第二節では、修道論に焦点を絞って『六十頌如理論』の構成を再考し、同論における修道論の骨子は（1）涅槃と輪廻は共に幻のようにあると説明する（第 1-17 偈）、（2）有為であるものの生滅を否定し、蘊等の教説の目的を解説する（第 18-39 偈）、（3）諸見と煩惱を生じさせない方法と理由を具体的に説明する（第 40-59 偈）、といった三つの部分からなることが明らかとなった。第三節では、『六十頌如理論』における縁起説に関する表現を精査し、『中論』と『六十頌如理論』における縁起に関する表現の差異点を指摘した。

第二章の第一節では、チャンドラキールティにとって、『六十頌如理論』の著作目的は仏の教説を集約した正理 (*yukti) によって、アビダルマに従う人々の有見を排除することにあ

って、般若波羅蜜多の方途 (prajñāpāramitāṅgī) を説明することによって戲論を寂滅するという『中論』の著作目的とは異なると指摘した。また、ナーガールジュナの四つの礼拝理由を説明するチャンドラキールティの注釈を再考した。第二節では『六十頌如理論注』における縁起説に基づく生滅の道と、不生である本質 (svabhāva) を完全に知る (遍知, pariñāna) 道とを考察した。生滅の道とは、生滅があるという教説を基礎として、諸行に対する執着の対治として、生を知って滅を知り、滅を知って無常性を知るという道である。不生の本質を遍知する道とは、此実執取身繫 (idaṃsatyābhiniveśaparāmarśakāyagrantha) の対治として、縁起したものが不生であるという道理によって不生の本質を遍知する道である。第三節では、チャンドラキールティによる遍知に対する理解を指摘した。すなわち、遍知は事物の個別相を構想分別することなく、対象を持たずに遍知しない仕方で、不生という本質を完全に知ることであり、すべての因相が寂靜であることを特徴とする。また、遍知の重点は蘊や諸趣等の対象の有為性 (形成された性質) に置かれ、有漏性ではない。苦諦を遍知するとき、四諦をも一刹那で同時に現観し、本質をもって不生不滅であると完全に知ることになる。

第三章の第一節では、『六十頌如理論注』におけるアビダルマ教学の修道論上の位置づけを指摘した。すなわち、アビダルマ教学は無見の過失を排除し空見の過失を避け、仏に対する敬愛の念を生じさせ、真実に入る手段として輪廻を止滅することに対する信解を生む。第二節では、アビダルマ教学を真実に入らせる手段として認めるのは、チャンドラキールティによる仏の教化方法に関する理解に関わると確認した。また、アビダルマ教学を基礎として空性の教えを学ぶ際に、その重要な接点を指摘した。さらに、五蘊等に対して、伝統的な諸門分別の仕方で観察することが否定され、縁起したものに、顕現するがままの同一の特徴 (固有の本質をもっては生じないこと) を如実に知り見ることが、解脱を実現する直接的な基礎になるということが明らかになった。第三節では、チャンドラキールティによる「聖語」 (āryavyavahāra) に対する理解は、聖諦の意味づけと二諦に関する位置づけに決定的な影響を及ぼしていると指摘した。

第四章の第一節では、『六十頌如理論注』における経典の引用目的が主に涅槃は何であるかを説明する文脈に係るが、『プラサンナパダー』第十三章の経典引用が『中論』の偈文に関する論難と回答に対する補足的教証を提示していると指摘した。また、「涅槃が唯一の諦である」云々といった経典に言及される「諸行は虚妄である」 (saṃskāra mṛṣā) という一文はチャンドラキールティにとって、聖者にとって事物が固有の本質をもたないもの (niḥsvabhāva) であると意味づけるために空性を明らかにすることに他ならないことを明らかにした。第二節は、両注釈はともに、諸行が虚妄であるという一文によって、空性を自内証知した状態を、そしてまた形成された事物をあるがままに知る状態を指し示していることを明らかにした。『六十頌如理論注』では空性論者の主要な立場、空性を修めることの重要性、空性を証得する状態を強調することが分かった。また、『プラサンナパダー』第十三章では、チャンドラキールティが naiḥsvabhāvya (=空性) によって niḥsvabhāvatva を、また mṛṣā によって mṛṣatva を意図的に区別している可能性を指摘した。

論文審査の結果の要旨

ナーガールジュナに帰せられる『六十頌如理論』(Yuktiṣaṣṭīkākārikā) は、チャンドラキールティ(600頃-650頃)によれば、『[根本]中論』(Mūlamadhyamakakārikā) と並んで重要な作品である。本論は、『中論』とはやや異なる視点から、<縁起>を直接のテーマとして考察する。それゆえ本論にも、『中論』と同様に、縁起を説くブッダに対する帰敬偈が置かれているとチャンドラキールティは意味づける。また、『中論』の個別のテーマから展開した各論的な位置づけを付与された『空七十論』や『廻諍論』に比べ、『六十頌如理論』に対してインドにおける唯一の注釈を著したチャンドラキールティは、同論を広義の「中」論とも呼び、重視した。

本論文は、第一部「研究篇」と第二部「関連テキストの校訂及び現代語訳」の二部によって構成される。第一部「研究篇」の序論では、本研究の思想史上の背景、先行研究の総括と本研究の問題意識、および目的と方法を提示する。その上で、第一章『六十頌如理論』の内容と思想』では、同論の三種のチベット語訳を比較考察し、同論の構成を明示した上で、『六十頌如理論』における縁起説を考察する。第二章は、同論に詳細な注釈を加えたチャンドラキールティの修道論を論じ、さらに本論文の一つの柱とも位置づけられる第三章では、本論および注釈にみる伝統的なアビダルマ教学の受容と批判を詳論する。とくに説一切有部とは微妙に異なる遍知(pari-√jñā/pari-jñāna)の意味づけを解明し、また縁起の的確な理解が、事物を非存在と見る無見を斥けるとともに、煩惱の原因を断つことに導くとするチャンドラキールティの縁起解釈を明らかにした点は特筆に値する。

その上で、伝統經典の援用と空性説を論じる第四章では、『六十頌如理論注』における經典引用と、同じ著者による中論注釈『プラサンナパダー(明句論)』第13章「サンスカーラ(行)の考察」(別名「空性の考察」)の經典引用を詳細に比較考察し、ともに諸行の虚妄性を指摘しながらも、引用意図および援用の仕方に相異が見られること、ならびにその背景をめぐって詳細で説得力のある考察を加えている。

第二部では、第一章で帰敬偈を含め総計で61偈からなる『六十頌如理論』の前伝期(敦煌写本とイエシェーデ訳『六十頌如理論』所引偈)の訳文と、後伝期(ニマタク訳のデブン寺写本とチベット大蔵経所収の諸版本)、ならびに近年発見・公開されたサンスクリット写本断片を含め、総計で37偈が回収されたサンスクリット語文の対照テキストと、和訳、サンスクリット語索引を提示する。また、第二章と第三章は『六十頌如理論注』のチベット語訳校訂テキストおよび訳注を行う。第四章、第五章、第六章は、研究篇の第一部・第四章で扱った『プラサンナパダー』第13章のサンスクリット校訂テキスト、同チベット語訳校訂テキスト、ならびに同章の訳注を提示した。ポタラ写本を含む「6つの良質な写本」に基づく同章のサンスクリット校訂本は、これ自体がきわめて貢献度の高い研究成果である。

令和5年3月1日午後3時45分から午後4時55分までの約80分にわたり、提出論文につ

いての口述試験を厳正に実施した。主査・副査から、提出論文の優れた貢献が評価されるとともに、部分的に補訂を要する箇所指摘もなされた。

口述試験終了後、主査・副査の合議の結果、本論文は『六十頌如理論注』に関する最新の研究資料にもとづき、従来、研究が乏しかったチャンドラキールティの修道論の構造と特色を解明した点で画期的な成果であり、中観思想史研究、とくに帰謬論証派の祖とも位置づけられるチャンドラキールティの研究に大きな貢献をなすと認められた。本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい成果であると判断する。